聖霊降臨後第 2 主日（特定 4）　マルコ 2 章 23―28 節

［新共同訳］

23 ある安息日に、イエスが麦畑を通って行かれると、弟子たちは歩きながら麦の穂を摘み始め
た。24 ファリサイ派の人々がイエスに、「御覧なさい。なぜ、彼らは安息日にしてはならないこ
とをするのか」と言った。25 イエスは言われた。「ダビデが、自分も供の者たちも、食べ物がな
くて空腹だったときに何をしたか、一度も読んだことがないのか。26 アビアタルが大祭司であ
ったとき、ダビデは神の家に入り、祭司のほかにはだれも食べてはならない供えのパンを食べ、
一緒にいた者たちにも与えたではないか。」27 そして更に言われた。「安息日は、人のために定
められた。人が安息日のためにあるのではない。28 だから、人の子は安息日の主でもある。」

①文脈

ⓐガリラヤ宣教の第一日目、いわゆる「カファルナウムの一日」（一 21―34）は、「会堂」で汚れた霊を追い出し、個人の「家」で熱病をいやし、「戸口」でさまざまないやしを行い、いわば人間生活が繰り広げられるあらゆる場所から悪の力を駆逐した一日であり、イエスの生涯を凝縮した一日。

ⓑこの後、中風の人をいやす話が（二 1―12）、橋渡しとなって、論争物語に入る。罪人との食事（13―17 節）、断食論争（18―22 節）、安息日論争（23―28 節）が展開される。

ⓒ3 章 1―6 節の論争物語では、イエスを訴えようと思って、安息日に病気をいやすかどうか注目する「人々」が現れる。三人称複数形の動詞が「人々」と訳されている。この人たちも 2 章 24 節と 3 章 6 節に登場する「ファリサイ派の人たち」と思われる。彼らの見解によれば、生命に差し迫った危険がないかぎり、医療行為は安息日に禁じられた仕事に含まれる。

ⓓ3 章 1 節に「イエスはまた会堂にお入りになった」とあるが、これは 1 章 21―28 節を踏まえている。ガリラヤ宣教の第一日目も安息日であり、その日、人々は「権威ある新しい教えだ」と驚いた。しかし、3 章では安息日の会堂での出来事は、ファリサイ派の人々にイエス殺害を思い立たせる。1 章 21―28 節との対比によって、ファリサイ派の悪意を浮き彫りにしている。

②安息日論争

ⓐイエスの弟子たちが安息日に穂を摘んだことをきっかけとして安息日の論争が始まる。律法では他人の畑でも鎌を使わずに手で穂を摘むことであれば、許されていた。

隣人の麦畑に入るときは、手で穂を摘んでもよいが、その麦畑で鎌を使ってはならない。（申二三 26）。

弟子たちの摘み方は収穫、つまり律法の規定への違反と見なされたのだろう。ファリサイ派の人々は「御覧なさい。なぜ、彼らは安息日にしてはならないことを…」と警告する。「御覧なさい」と訳されているのは、基本的に「見よ」と訳される語で、注意を促すとき、指示や提示をするときなどに用いられる。ファリサイ派の人々は自分たちが「見た」律法違反の行いを、イエス

にも「見よ」と言って、師であるイエスを糾弾する。ファリサイ派の人々にすれば、イエスの弟子が行っていることは罪深いことである。彼らには、イエスがそれを咎めもせずにいるのが許せないのだろう。彼らは、イエスに目の前に起こっていることを見て、間違いを認めろ、と言う。警告を受けていながら、安息日規定を無視する者は、石打ちの刑に処せられた。

ⓑファリサイ派に対するイエスの答えは25―26節と27―28節の二つの部分から成り立っており、前半（25―26節）ではダビデの逸話（サム上二一 1―7）を使ってイエスは答えている。

ファリサイ派の問い

なぜ、彼らは安息日にしてはならないことをするのか。

イエスの答え

ダビデが、自分も供の者たちも、食べ物がなくて空腹だったときに何をしたか……ダビデは神の家に入り、祭司のほかにはだれも食べてはならない供えのパンを食べ…。

傍線をつけた「する」と点線をつけた「ならない」はそれぞれ同じ言葉である。このことに注目すると、「何をしてはならないか」ということに興味を置くファリサイ派の人々に対して、イエスは「してはならない」ことを「した」ダビデを例にあげて、律法を杓子定規に読もうとするファリサイ派の誤りを指摘していることが分かる。

Ⓒダビデが…供えのパンを食べ…

逃亡中のダビデがノブの祭司アヒメレクのもとに行き、パンを所望するが、その日は「パンを供え替える日（＝安息日）」であり、普通のパンがなく、「主のもとから取り下げた供え物のパン」を食べたという故事（サム上二一 1―7）。ただし、登場する祭司の名はアヒメレクであって、アビアタルではない。

ⓓ読んだことがないのか

ファリサイ派は聖書を守ることを大事にしていた人たちであるから、イエスが引用した聖書箇所を読んでいないはずがない。しかも、「読む」と訳された動詞アナギーノースコーは「知る」を意味するギーノースコーと「十分に」を表す接頭辞アナによる合成動詞である。聖書を「十分に知っている」はずのファリサイ派の人々に、「一度も（十分に）読んだことがないのか」と尋ねたのだから、「あなたがたは読んでいるのに読んでいない」と言うのと同じことである。イエスとファリサイ派の人々との間には、読み方に大きな違いがある。

③安息日規定

ⓐ安息日の起源については確かなことは分かっていないが、紀元前 9 世紀頃にはすでに実行されていたのは明らかである。安息日規定は旧約聖書のいろいろな箇所で述べられている。例えば、出エジプト記20章から34章にかぎってみても、次の 4 箇所に現れる。

① 20章 8―11節（十戒）
② 23章 12節
③ 31章 13―17節
④ 34章 21節

それぞれの節数にはばらつきがあることからも分かるように、その内容が完全に一致しているわけではない。もっとも短い安息日規定は34章21節である。

あなたは六日の間働き、七日目には仕事をやめねばならない。耕作の時にも、収穫の時にも、仕事をやめねばならない。

ここでは「六日の間働き、七日目には必ず仕事をやめねばならない」ことが規定されている。これはどの安息日規定にも見られる本質的な要素であり、20章8―11節と23章12節ではさらに安息日の根拠づけが加えられ、最も長い31章13―17節になると、その他に罰則規定が加えられている。

ⓑこのような事実から推測できることは、聖書が述べる安息日規定の本質は同じであっても、時代によって表現が変わっていることである。おそらく最も短い34章21節が最古であり、最も長い31章13―17節が最新の安息日規定だと思われる。重要視される掟であればあるほど、時代とともに長くなるのが普通だからである。いわば安息日は神が人類に与えた課題であり、ただ「仕事をしてはならない」とだけ述べることによって、仕事が真に仕事となるためには何が必要なのかを考えるようにと促している。出エジプト記20章から34章にかぎってみても、4箇所に安息日規定が置かれているのは、それぞれの時代の人々が神の問いかけに真剣に応じた結果である。このように、聖書にはさまざまな時代の信仰告白が積み重ねられている。

ⓒ最古の安息日規定と思われる出エジプト34章21節が明確にしているように、安息日規定は「仕事をしない」ことに特徴がある。安息日には仕事をせずに休めと定めているが、それは骨休めのためではなく、人間生活の基盤がどこにあるかを思い起こすためであった（詩一二七）。つまり安息日の目的は、仕事をしないことによって、人間は神のものであるという原点を思い起こし、そこに帰ることである。それを怠れば、自分の利益に目が向かい、同胞を搾取したり、奴隷として売買することになりかねない。

ⓓ前8世紀中頃の預言者アモスは商人を批判し、次のように語る。

このことを聞け。
貧しい者を踏みつけ
苦しむ農民を押さえつける者たちよ。
お前たちは言う。「新月祭はいつ終わるのか、穀物を売りたいものだ。安息日はいつ終わるのか、麦を売り尽くしたいものだ。エファ升は小さくし、分銅は重くし、偽りの天秤を使ってごまかそう。弱い者を金で、貧しい者を靴一足の値で買い取ろう。また、くず麦を売ろう。」
（アモ八4―6）

この商人は商売熱心で、新月祭や安息日にも店を開けておきたくて仕方がない。穀物や麦を売れば、儲かるからである。しかし、利潤に目が向かうと、良心が痛まない程度にエファ升を小さくし、利益が膨らむことが分かれば、分胴を重くし、偽りの天秤を用いることも怖くなくなり、ついには奴隷売買にまで手を染め始める。利潤が多すぎたり、興味を掻き立てる仕事はかえって危険であり、知らず知らずのうちに、良心の麻痺を引き起こしている。「六日の間働き、七日目に仕事をやめる」のは、単に休むためではなく、むしろ仕事にのめり込むことによって、仕事が真

の仕事でなくなることを避けるためだといえる。

ⓔバビロン捕囚の頃から、割礼と安息日規定の厳守が強調されるようになり、安息日を守るために「してはならない」仕事が細かく規定されていった。こうして、刈り入れも禁じられた仕事のひとつに数え上げられていく。ミシュナー（成文律法を現実社会に適合させるために行われた解釈の収集）によれば、刈り入れは安息日に禁じられた39の仕事のひとつに数えられている。しかし、ひとたび細則ができると、それを守ることに注意が向かい、本来の趣旨が忘れ去られてしまう。イエスは安息日の本来の意味を回復しようとしたのであり、それによってファリサイ派との違いが明らかになる。

④安息日は、人のために生じた

ⓐ動詞「生じる（ギーノマイ）」が「ある」の意味であれば、「安息日は人のためにある」であり、「なる」の意味であれば、「安息日は人のためにできた」と訳すことができる。前者であれば、安息日は創造に基づく永遠の秩序であり、後者であれば、歴史の流れの中で成立した制度である。おそらく後者の意味だろう。

ⓑファリサイ派的な敬虔さに対して、イエスは25―26節でダビデの故事を引用して、弟子たちをかばい、さらに27―28節では「安息日は、人のために定められた。人が安息日のためにあるのではない」と述べて、ファリサイ派の敬虔を批判する。イエスのこの言葉は安息日そのものを否定したのではなく、安息日を大事にしようと力むあまり、細則に目を奪われ、本来の意味を忘れてしまったファリサイ派的な行動に異議を唱えている。

⑤人の子は安息日に対しても主である

ⓐ中風の人をいやす話では罪の赦しが問題とされ（二1―12）、これが橋渡しとなって開始された論争物語では、罪人との食事、断食、そして最後に安息日が論じられた。「人の子は安息日に対しても主である」と述べることによって、論争されたすべての課題に対して、イエスは主であることが示される。

ⓑ3章1―6節では、イエスは手の萎えた人に、「真ん中に立ちなさい」と言い、明らかに敵意を持つ人々に対して、「安息日に律法で許されているのは、善を行なうことか、悪を行なうことか。命を救うことか、殺すことか」と答える。安息日の趣旨は、旧約聖書のさまざまな箇所に残されている、いろいろな時代の安息日規定が示しているように、「七日目には仕事をやめねばならない」という神の戒めの意義を考えることであって、文字となった細則を厳格に守り、それを振りかざして他人を批判することにはない。細則を先に立てて批判する態度は安息日の本来の精神にもとることである。イエスにとっては、他人の命に配慮する隣人愛は安息日に関する細則を凌駕するのであり、これこそ安息日の目的である。

ⓒファリサイ派の人々はイエスの弟子の行いを律法違反と考え、勝ち誇ったように「見よ」と指摘したが、イエスは彼らが見ていないものを見ている。ファリサイ派の人々もイエスも同じ聖書と律法を読んでいるが、ファリサイ派の人々は安息日規定にのみ捕らわれてしまい、安息日が、人間の生の根源である神と向き合う日であることを見落としてしまった。安息日は人を生かそうとする神の思いに出会うためにある。それを教えるイエスのほかに、「安息日の主」はいない。